

145 御深井焼大花瓶の発見とその価値

随分以前のことになるが、寺本の法海寺から、古瓦が出土した知らせをうけたので、早速調査に行き、世話人の方から事情を聞いていた時、大きな花瓶を抱え出してきて、「この花瓶を見て下さい」という。見ると、何とこれは、おふけ（御深井）焼の大花瓶であった。

目をみはるような堂々とした姿の双耳の大花瓶で、御深井釉がたっぷりかかり、腰のあたりに「光友」と大きく印がおされている。二代尾張徳川藩公からお下賜になったものであることは明白である。

尾張初代藩主義直が、名古屋城の外郭御深井丸に窯を築き各地に離散していた瀬戸の陶工を呼び返して、御深井窯を創始したが、二代藩主光友も、万治三年（一六六〇）に太兵衛を呼び寄せて、一層盛んに御深井窯を焼かせている。法海寺の大花瓶は、この時に焼かれたものである。

史実の上から、尾張藩主の御用窯の御深井窯は明白であるが、その作品のたしかなもの発見されていなかったのが、一抹の不安をもっていった。今度の法海寺の光友公下賜の大花瓶の発見は、その意味からその価値は大したものであった。御深井窯の歴史のたしかな証拠としてもさることながら、近世初期の瀬戸焼きものの歴史に、一番重要なポイントにもなるものであるとともに、日本陶芸史上からも重要なポイントになる貴重なものである。

（前常滑陶芸研究所長 沢田 由治）

